

新しい芸術はどのようにして 地域から生まれるのか？ ：リーズと日本の事例検討

How Can New Art be Developed in a Local Area? : The Cases of Leeds and Japan

要 真理子
Mariko KANAME

Abstract

In England in the early 20th century, Leeds, a regional city located in the north of West Yorkshire, served as a hub for novel art movements based on local communities including a university, social groups, and so on. Consequently, Leeds came to be an artistic city rivalling London. Its status derived from the contributions of an abundance of art collections that have been built since the 19th century and of talented artists who had been developed by way of the collections in Leeds. Moreover, such artistic resources were used as cultural fortune or wealth in the entire region. This paper has two aims: firstly, to examine why a local city could come to play a greater role in art than metropolitan cities at that time, with respect to the Leeds Arts Club; secondly, it aims to consider a potential ideal way to develop both new art and art in local areas in present-day Japan. To these ends, the study will apply knowledge gained from a discussion of two workshops held in Tokyo and Kyoto during 2017-18. As result, the study will produce recommendations for promoting regional development through art and for creating a hub of art and education in Japan.

Key words : Art, Art education, Regional development

はじめに

本稿は、平成29年度、東京と京都で二回に亘って開催された公開研究会「新しい芸術はどのようにして地域から生まれるのか」における議論を集約し、新しい芸術の創出と地域活性に向けた理想的な取り組みについて検討を行うものである。

最初に、両研究会の基調報告¹で紹介した20世紀初頭の英国地方都市リーズにおける「リーズ・アーツ・クラブ (the Leeds Arts Club)」を中心とした芸術運動とコミュニティの取り組みについて、地域性と芸術運動の二つの側面から考察する。次に、このリーズの取り組みが時代や地域を超えて適用可能なモデルとなりうるのかを検証するために、第一回研究会の議論の中心となった地域行政の観点を含めつつ、日本国内における芸術文化の現状を参照したうえで、第二回研究会で「芸術文化」の範囲が一つの地域を超えたところの課題、すなわち、教育、観光、福祉といった広汎な領域から提示された意見を集約する。最終的には、これらを日本における芸術による地域振興ならびに芸術思想・教育の拠点育成に寄与する提言としてまとめるために、本稿をそのための試論と位置づけたい。なお、ここに扱った研究会の議論は同日の記録から著者が抜粋・整理したものに検討を加えており、実際に交わされた発言とは異なることを予め記しておく。

第一章 英国地方都市リーズにおける革新的地盤の形成

本章では、英国地方都市リーズが20世紀初頭に前衛美術運動の拠点の一つとなったことに注目し、この事例を産業の変遷と社会構造の特徴という観点から跡づける。

ウェスト・ヨークシャー州の北東部に位置するリーズ市（図1）は、マンチェスターやバーミンガムと並ぶ近代産業の拠点の一つとして知られる。実際、その地盤は、ヨークシャー地域が羊毛原料の産地として栄えた11世紀においてすでに形成されつつあった。リーズは、そこから、産業革命期には、運河や鉄道の敷設によってインフラを整備したうえで、新たな動力源となる石炭の採掘業や、毛織物製品業や印刷業への展開を見せ、20世紀には、そうした製造業から金融業へと、時代に応じた産業への転換を遂げてきた。もっと言えば、第一次産業から第二次産業、そして第三次産業への移行のなかで、リーズでは時宜相応であるのはもちろんのこと、地域に根ざし

1 第一回公開研究会報告者：前田茂、京都精華大学教授（美学・芸術学、映像美学）、第二回公開研究会報告者：要真理子、跡見学園女子大学准教授（美学・芸術学、美術批評）

新しい芸術はどのようにして地域から生まれるのか？：リーズと日本の事例検討

た新たな産業分野が開拓されてきたのである。その一方で、同時代産業を強みとする近代的な地方都市という側面に加えて、リーズは古代・中世の建造物や博物館等文化的遺物のほか、雄大な自然も有しており、地域外からの多くの旅行客を魅了するに事欠かない観光資源を豊富に留めている。現在では、そうした資源のおかげで観光産業もまた、リーズの主産業の一つに数えられる。



図1 イングランド・ウェールズ地図

地域労働者は地域産業の開拓に取り組んだだけでなく、経済的發展や独特な文化的形成にも寄与している。ときとしてヴィクトリア朝の新興中流階級を指して用いられる「セルフ・メイド・メン」の典型はリーズ出身者であることが多い。この言葉は、日本語では「たたき上げ」と訳されることがある。つまり、それは、労働者が階級を超えて立身出世していく様を表しているのだが、そのために必要なのが教育であった²。英国では19世紀中頃から、ヘンリー・コウル（Henry Cole, 1808-1882）らが中心となって立案された政策により、職工訓練のための国営の美術課程が各地方で開講されていた（要・前田、2017: 4-8）。それゆえ、繊維工場の見習工からリーズ市長になったジョーゼフ・ハップワース（Joseph Hepworth, 1834-1911）やヘンリー・ローランド・

2 「セルフ・メイド・メン」の典型とされ、後にマンチェスター市長として活躍する David Bellhouse もまたリーズに生まれ、同地の学校で算術と製図の基礎を身につけた（Bradford, 2016）。

マーズデン (Henry Rowland Marsden, 1823-1876)、あるいは染色工場の見習工から大実業家となったジェームズ・キットソン (James Kitson, 1807-1885) など「セルフ・メイド・メン」は、いずれも起業に必要な技術と知識を取得する機会にめぐまれていた (Bradford, 2016)。このようにして、労働者階級の成功モデルが提供されたことにより、リーズ周辺では、19世紀において職工による新規事業の開拓が相次ぐようになった³。ハップワースもキットソンも職工訓練所の所長となり技術教育の普及に貢献しただけでなく、晩年は、地元の音楽祭や図書館を充実させることで地域住民に教養や娯楽の場も提供しようと努めている。

その一方、リーズやその隣のブラッドフォードでは、早い時期から女性が繊維産業や印刷産業で賃金労働に従事したことを契機として女性の就業や社会参加が注目され、その結果、多くの女性教育者や女性博愛主義者が輩出された。フェミニズムの活動家のイザベラ・フォード (Isabella Ford, 1855-1924) やアニー・ベザント (Annie Besant, 1847-1933) のほか、過激な女性参政権運動家、通称「サフラジェット (Suffragette)」のレオノーラ・コーエンもリーズ出身者であった⁴。フォードとベザントは中流階級の子供に生まれたが、少女時代より労働者と接点をもつ環境にあり、前者は政治的⁵、後者は思想的な活動⁶に参加し労働者の生活改善を目指した。こうした女性労働者たちも参加して、1893年にリーズに隣接するブラッドフォードで独立労働党 (ILP) が結成されることになり、19世紀末のリーズ周辺では当時の英国で最も革新的な地盤が固められつつあった。

それでは、上述のような地域労働者による地域労働者のための活動は、本稿のテーマとなる新しい芸術の誕生とどのような接点をもっていたのだろうか。当然ながら、前衛芸術運動として結実するためには、「立身出世した」者たちが主導する「上からの」改革に加えて、地域のみならず外部から移住した人々の支援が大きく関与していた。なかでもフィランソピストや美術愛好家たちの活動は、作品収集をはじめ、クラブや基金の設立等リーズの文化形成に貢献した。代表的

3 リーズでは服飾業の NEXT の前身 (Joseph Hepworth & Son) が1864年に、工業機械の J & H・マクラーレン (J&H McLaren) が1876年に、小売業のマークス&スペンサーの前身が1884年に、印刷業から出発し、カードゲームとボードゲームの会社となったワディントン (Waddingtons) が1896年に、また隣のブラッドフォードでは、小売業大手のモリソンズが1899年に起業している。

4 Suffragist と Suffragette は、英国内でも混同されることが多いが、前者が一般的な「女性参政権運動家」の呼称であるのに対し、後者は政府に対して、ハンガーストライキや国宝級の美術宝飾品の破壊、放火など「ほとんどテロリストのような」過激な運動家を指している——A interview with a curator of Leeds Art Gallery Nigel Walsh at Henry Moore Institute on March 2nd 2018.

5 イザベラ・フォードの父は繊維工場で働く少女たちが通学する夜間学校の教師であり、そこからフォード自身も階級や労働条件の問題に関心をもつようになった。のちに、独立労働党 (Independent Labour Party) の創設に参加するようになる (Roberts & Mizuta, 1993)。

6 アニー・ベザントはアイルランドに生まれ、児童期をリーズで過ごしている。のちに、神智学サークルを主導し、自著『想念形態』をカラー印刷で出版する。A interview with Tom Steele at Leeds University on August 21st 2015.

な人物としては、当時アカデミーを離れた若い画家たちの集団、ラファエル前派を擁護したエレン・ヒートン（Ellen Heaton, 1816-1894）が挙げられる。彼女は、美術批評家ジョン・ラスキンの理論に心酔し、親から継承した遺産を資金として美術品の購入や芸術家の庇護に努めた。他方、ヒートンは、ラスキンに促されて女性教育と労働者を対象とする大学拡張運動（university extension）の支援も行っている。かくして、革新的な雰囲気とアートへの情熱が交差するなか、先述した ILP の結成に参加した学校教師アルフレッド・オレイジ（Alfred Orage, 1873-1934）と著述家ホルブルック・ジャクソン（Holbrook Jackson, 1874-1948）らによって、1903 年に「リーズ・アーツ・クラブ」が創設されることとなったのである。

第二章 「リーズ・アーツ・クラブ」の軌跡

すでにリーズには「リーズ・ファイン・アーツ・クラブ」⁷が 1874 年に設立されていたが、こちらが、いわば有閑階級を会員とした守旧的な美術クラブそのものだったのとは異なり、リーズ・アーツ・クラブは労働者階級を対象とした。また、ILP や労働組合のように政治的手段に訴えるのではなく、芸術によって社会を改革しようとする彼らの設立趣旨には、ウィリアム・モリス風の社会主義やアーツ・アンド・クラフツ運動の影響がうかがえる（Steele, 2014）。

リーズ・アーツ・クラブは、指導者の交代によって二つの時期に分けることができる。第一期は、創設から 1906 年頃まで、オレイジとジャクソンが中心となって活動が行われた。その内容は、哲学や文学をテーマとした夜間講座、特別講演の他、演劇の上演や演奏会など文化的な交流の場の提供にあった（Steele, 1990）。このほか、ILP やフェビアン協会等と交流し、クラブでは、社会主義思想の他、フェミニズム思想、神智学、ニーチェの超人思想など、先端的な理論や思想も紹介された。とりわけ、イプセンの戯曲は、サフラジェットはもちろんのこと、女性労働者たちを刺激したと言われる（Liddington, 2006: 32）。

1906 年にオレイジとジャクソンが英国全土への運動の拡大を期して本拠地をロンドンに移動すると⁸、求心力を失ったクラブは、たとえば、シャツ製造業を営んでいたトム・ヘロンがナッ

7 もともと、リーズ・アーツ・クラブが 1903 年にオレイジとジャクソンによって立ち上げられる以前、すでにリーズには「Leeds Fine Art Club」（以下 LFAC と略）が存在していた。LFAC の後継団体である「Leeds Fine Artists」（2010 年に LFAC から改称）のウェブサイトによれば、1874 年の LFAC 設立の背景にあったのは、18 世紀を通じての産業の拡大に伴い、それに従事する新興中流階級が勃興したことと、その文化的な関心が高まっていったことである。このウェブサイトでは、LFAC の会員らによる例会とそこでの議論は「conversazione」と呼ばれてリーズ市の文化的な生活において大きな役割を果たし、また「Philosophical Hall」で開催された年次展は地域で名が知られていたとされる（Leeds Fine Artists: 2017）。

シュ兄弟やスタンリー・スペンサーのような芸術家にデザインを依頼して共同製作を行なうなどギルド社会主義的な組織活動へと変質する。しかしほどなくして、大学、美術館と連携し、地域在住・出身の芸術家の支援の枠組みが整えられる。それが第二期であり、この時期は、オレイジとジャクソン不在のクラブを主導したマイケル・サドラー(Michael E. Sadler, 1861-1943)のリーズ大学副総長在任期間(1911年から23年まで)に相当する。

サドラーは、医薬学と理学を基盤とするリーズ大学に人文学部を新設し総合大学への拡大を図った。もともと美術品収集家であったサドラーは、すでに歴史的価値が承認されている19世紀のターナーやコンスタブルだけでなく、カンディンスキーやセザンヌなど同時代の新しい絵画も多数所有していた。サドラーのコレクションの多くは、現在、リーズ大学美術館に寄贈されている⁹。また、サドラーは、当時モダンアートの状況を最もよく知る人物の一人、美術批評家のフランク・ラター(Frank Rutter, 1876-1937)をロンドンからリーズに招へいし、1912年にリーズ市美術館の学芸員に着任させた。ラターの自伝『Since I was Twenty-Five』には、当時のリーズおよび地方美術館における、芸術品の質を充実させるよりもむしろ、「地元の政党指導者に便宜を図った」党派的な運営への不満が記載されている(Rutter, 1927: 203)。美術館の作品購入を決定する組織である美術館評議会は、言ってみれば市議会の傘下にあり、作品購入においてラターの意見が通らないこともしばしばあった。そこで、彼は、サドラーや、リーズの富裕な美術愛好家からの支援を受けて市の組織から独立したリーズ美術基金(The Leeds Art fund)を1912年に立ち上げ、美術館評議会の方針に左右されない美術作品の購入の道筋を開拓した。この美術基金は美術館の一般賛助会員組織としては英国で最初のものであった(Ahad, 2012)。

1913年に、サドラーとラター協力のもと、リーズ・アーツ・クラブで開催されたポスト印象派展は、サドラー所有のカンディンスキーをはじめ同時代の新しいアート作品が公開され、前年にロンドンで行われた同名の展覧会以上に先進的な展示であったと言えよう。残念ながら、リーズの空気に馴染めなかったラターが1917年にロンドンに戻り、1923年にはサドラーがオクスフォード大学へ転出したことで、第二期「リーズ・アーツ・クラブ」は幕を閉じる。リーズ大学図書館、英国図書館の司書だったジェフリー・ウォレッジ(Geoffrey Woledge, 1901-88)によれば、それは同時に、クラブ自体の終焉でもあったとされる(Steele, 1990: 20)。

8 オレイジは、バーナード・ショウの支援を得て、当時経営難にあったキリスト教社会主義の雑誌『The New Age』を買収し、編集長となった。この雑誌はヴォーティシズムをはじめとする、前衛芸術の動向を英国全域に知らしめる役割をもった。

9 A interview with a curator of Stanley & Audrey Burton Gallery Layla Bloom at Leeds University on August 22nd 2015.

新しい芸術はどのようにして地域から生まれるのか？：リーズと日本の事例検討

年表 リーズ・アーツ・クラブに関係する主たる出来事

	ロンドン	リーズ
1888 年		Leeds Art Gallery 創設
1893 年		Orage、リーズ教育委員会委員になる
1898 年頃	Orage、Bernard Shaw ら知識人と知己を得る	
1903 年		Orage、Jackson、Leeds Arts Club 創設 Leeds School of Art 創設
1906 年	Orage、Jackson、ロンドンへ移住	
1907 年	Orage、『The New Age』買収、編集長となる	
1908 年	Rutter、Allied Artist Association を設立	
1911 年		Sadler、Leeds 大学副総長になる
1912 年		Rutter、Leeds City Art Gallery 学芸員着任 Rutter、Leeds Art Collection Fund 設立
1913 年		Leeds Arts Club で Post Impressionism 展、開催 この頃、Kandinsky、Leeds 訪問
1917 年	Rutter、ロンドンへ移住	
1923 年		Sadler、Leeds を去る

現代に継承されるリーズ・アーツ・クラブの遺産は、第一に、芸術家、および教育者や支援者といった豊富な人材、そしてサドラー・コレクションなどの膨大な美術コレクション、第二に、地方都市と首都、および他地域を横断する人的循環と文化的連関のシステム、たとえば、ブラッドフォード出身の実業家エリック・グレゴリー奨学金や先述したリーズ美術基金なども、このシステムの産物である。第三に、1990 年に設立されたウェスト・ヨークシャー・プレイハウスに代表される地域住民のための文化施設が挙げられる。プレイハウスの前身はリーズの芝居愛好家グループの活動に遡ることができ、その活動もリーズ・アーツ・クラブの一環として行われていた。もう一つ、リーズ出身者でありリーズ大学で教鞭を執ったハーバート・リードによって 1947 年に構想され、1950 年に設立された現代芸術研究所（ICA）もまた、場所はリーズではなく、ロンドンではあるが、アーツ・クラブの機能を十分に引き継いでいる。

産業革命以降の経済的な発展と元来の強い独立心、そしてそれらに裏付けられた地元意識が、先鋭的な思想と芸術を喜んで迎え入れる雰囲気醸成し、そこに芸術庇護者や文化・知識人の移住などの条件が重なり合って、リーズの地に本格的な前衛芸術の拠点が作り出されたのである。

第三章 日本における地域文化行政

第一章、二章において考察した前世紀の英国地方都市の事例が、現代の日本の地域文化行政にそのままあてはまるとは考えがたいが、本章ではリーズの先例を現状を整理する上での一つのモデルとしつつ、第一回公開研究会で報告された豊中市と台東区の事例を確認したい。

1. 豊中市における文化芸術の取り組み——まちのDNAを視野に置いて——¹⁰

豊中市は、大阪市の北西部に位置し、市域は同市都市計画マスタープラン（図2）では7つの地域に区分される。なお、本節で、芸術・文化の動向を後述する際には、歴史的な来歴の観点で特徴的な地域として、明治末期から昭和にかけて郊外地として進展したエリアを主とする中部および中北部、昭和30年代後半から日本初のニュータウンとして開発が進んだ千里ニュータウンを擁する北東部、高度経済成長期に急速に発展し商工業地域が混在する南部に注目する。市内には、大阪大学や大阪音楽大学があり、数十年前から官学連携に着手し、10年程前には市との「連携協力に関する包括協定」を締結している。市立の主たる文化施設としては、市のほぼ中央部に視覚芸術から演劇、音楽、映画など多様な芸術文化に対応できる豊中市立芸術文化センターがある。同センターは、昭和43年に芸術文化の拠点として開設した市民会館を建て替えて平成29年1月に開館したもので、現在も私立の美術館は建設されていないものの、同市では、日本センチュリー交響楽団と平成24年に結び結んだ「音楽あふれるまちの推進に関する協定」をもとに、「まちなかクラシック」をはじめ「音楽あふれるまち」を標榜するにふさわしい取り組みを展開している。視覚芸術の領域においては、子どものための創作ワークショップや市所蔵美術品を用いた対話型鑑賞、市民ギャラリーでの特別展などの企画も見られるが、そこに独自性を生み出すことが今後の課題の一つであろう。紹介されたなかで、旧羽室家住宅アート・プロジェクト「子どもの情景——時を超えて——」は、アートの主題と展示空間が合致した地域色のある企画と思われる。

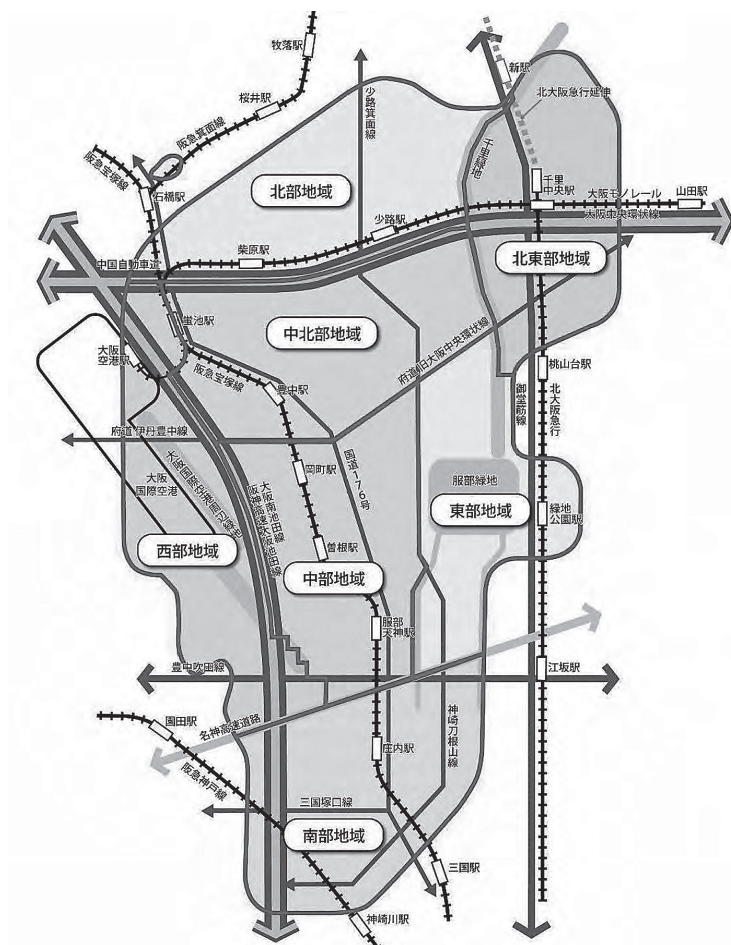
以下、歴史的な来歴が特徴的な地域を取り上げながら芸術・文化の動向を示す。

- ・中部および中北部の、明治末期から形成された岡町・豊中など当時の郊外住宅地と、北東部の、昭和30年代後半からの造成による千里ニュータウンのいずれにも、構想の端緒に英国田園都市の理念が見出される。

10 発表者：加藤隆司、豊中市役所都市活力部魅力創造課主査。

新しい芸術はどのようにして地域から生まれるのか？：リーズと日本の事例検討

- ・中部および中北部、北東部における「とよおか創造界限」「とよなか 子どもクリエイティブ・ガーデン」などの芸術文化プロジェクトでは、地域名を冠しており、「魅力ある界限性」の実感や「まちの創造性」による訴求が意図されている。
- ・南部は、活気ある豊岡市場などが立地する庄内エリア。日本センチュリー交響楽団、大阪



地域	地域区分
北部	大阪中央環状線以北の地域および千里緑地以西の地域
北東部	千里ニュータウンおよび上新田からなる千里緑地以東の地域
中北部	阪急宝塚線沿線地域で千里緑地以西および府道旧大阪中央環状線以北の地域
中部	阪急宝塚線沿線地域で府道旧大阪中央環状線以南および名神高速道路以北の地域
西部	阪神高速道路および大阪国際空港周辺緑地以西の地域と阪急蛍池駅以西周辺の地域
東部	北大阪急行・御堂筋線沿線地域で天竺川以東および名神高速道路以北の地域
南部	名神高速道路以南の地域

図2 豊中市地域区分図

音楽大学、市民活動団体と市の協働による「世界のしょうない音楽祭」のほか、大阪大学や地元住民、市の協力体制を基にした廃止施設の記憶をとどめるインスタレーションと新施設設計への提案など、地域課題に向き合うアートの可能性を模索している。

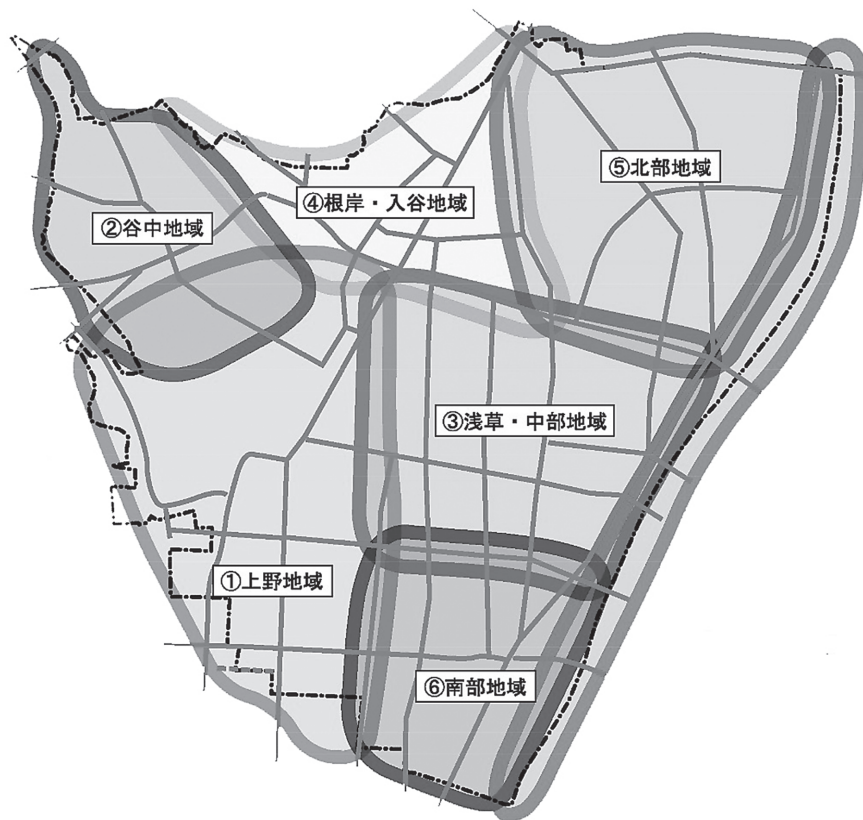
豊中市の魅力創造課をはじめとする芸術文化プロジェクトは、特色の見出しにくい住宅地をメインとする中部および中北部、北東部において、あるいは商工業地域の混在する南部において、アートを通じてどのように各地域に固有の魅力を発見ないし再発見するかに目標が定められている。

2. 台東区と東京藝術大学との連携の取り組み¹¹

現在、国内外からの観光客で大変な賑わいを見せている上野・浅草地域は、奈良時代に建立された浅草寺をはじめ、寛永寺、上野東照宮など東京都のなかで最も寺社仏閣が多く、昔から人々の集まる地域として知られている。そうした歴史的資源に加え、明治以降、上野公園には美術館・博物館、図書館など近代国家を支える文化施設が集中して建設された。主なものだけでも、東京国立博物館、国立科学博物館、国立西洋美術館、国際子ども図書館、東京都美術館、東京文化会館、上野の森美術館、上野動物園など国立・都立、私立の文化施設が集積している。また、台東区には東京藝術大学、上野学園大学といった芸術大学が位置しており、極めて文化的な地域として全国的に認知されている。とりわけ前者と台東区とは35年以上にわたってさまざまな交流・連携事業を行っている。たとえば、東京藝術大学美術学部の優秀な卒業作品の制作者には「台東区長賞」や「台東区長奨励賞」が授与され、受賞作品は区内で展示されるのはもちろんのこと、「台東区長賞」受賞作品は区に寄贈されて、区の貴重なコレクションとなる¹²。「交流・連携」の文字通り、双方向の関係が構築されていることがわかる。近年では上野の山文化ゾーンのような地域性を押し出したプロジェクトのほか、JOBAN アートラインといった、常磐線沿線で開催されるさまざまな地域のアート情報を共同で発信する取り組みにも同区は参加している。その一方で、区と他機関（大学）との官学連携事業のほとんどが、実際には、各部署と各学科単位で行

11 発表者：内田円、台東区役所文化産業観光部文化振興課課長（発表当時。なお、現在は、総務部人事課長）。また、事前に、台東区長服部征夫氏にもインタビューしている。A interview with a mayor of Taito Ward Yukuo Hattori at Taito city government office on June 22nd 2017.

12 昭和56年度から、優秀な卒業作品（日本画、油画・版画）の制作者に「台東区長賞」、平成20年度からは、彫刻・工芸・デザインの各分野の優秀な卒業・修了作品の制作者に「台東区長奨励賞」が授与されている。平成29年度には、台東区における文化行政の、また、東京藝術大学との交流の出発点ともいえる旧東京音楽学校奏楽堂のリニューアルオープンを契機として、音楽分野における台東区長賞が創設された。



地域	地域区分
上野	台東1～4丁目、秋葉原、東上野1～5丁目、上野1～7丁目、池之端1～3丁目、北上野1丁目、上野公園
谷中	上野桜木1～2丁目、谷中1～7丁目、池之端4丁目、(上野公園)
浅草・中部	東上野6丁目、寿1～4丁目、駒形1～2丁目、元浅草1～4丁目、松が谷1～4丁目、北上野2丁目、西浅草1～3丁目、雷門1～2丁目、花川戸1～2丁目、浅草1～2丁目
根岸・入谷	下谷1～3丁目、入谷1～2丁目、根岸1～5丁目、竜泉1～2丁目、千束1～2丁目
北部	竜泉3丁目、三ノ輪1～2丁目、橋場1～2丁目、浅草3～7丁目、千束3～4丁目、東浅草1～2丁目、日本堤1～2丁目、今戸1～2丁目、清川1～2丁目
南部	小島1～2丁目、三筋1～2丁目、蔵前1～4丁目、柳橋1～2丁目、浅草橋1～5丁目、鳥越1～2丁目

図3 台東区地域区分図

われるため、台東区全体としての文化政策の方向性が見え難いように思われた。また、興味深いことに、所蔵する貴重なアート作品のための「区立」の美術館を有していない。以下、台東区の地域区分ごとの芸術・文化の動向を示す。

- ・上野地域 商業・業務施設や観光・芸術等の文化施設が集積する地域。「上野の山文化ゾーン」「上野文化の杜 TOKYO 数寄フェス」など芸術大学や文化施設と連携した取組みが目立つ。また、台東区はもちろん、東京都、文化庁、東京藝術大学、地元団体が連携し2020年東京オリンピック・パラリンピック競技会に向けた上野「文化の杜」新構想が打ち出され、名実ともに大プロジェクトが進行している。
- ・谷中地域 寺社、霊園、下町情緒ある街並み等、歴史的な文化資源、観光資源が多く分布している地域
- ・浅草・中部地域 商業・業務施設や観光・集客施設が集積する国際観光地。「浅草歌舞伎」（浅草公会堂）などの伝統芸能を継承・発信する場である一方、「東洋館」などは同時代の演芸を提供する場でもある。
- ・入谷・根岸地域 多くの文人墨客が風雅に暮らした地域であり、住宅地としての性格が強い。書道博物館が位置する。

二つの発表のあとで、ディスカッションが行われた。意見の一例を紹介する。

- 1) 豊中市にも、台東区にも、市立あるいは区立美術館が存在しない。
- 2) 現代アートの企画を見ると、視覚芸術の展示よりも音楽・演劇などパフォーマンスの方が多い。
- 3) 「地域性」を追求するとき、その町の雰囲気を建築や街並みに求める傾向が強い。作品や企画自体には地域性が見出しにくい。

豊中市の芸術文化の企画が音楽をはじめとする公演芸術へと傾斜するのは、音楽資源が豊かであるに加えて、平成7年の阪神・淡路大震災の被災などに伴う市立美術館設立計画の凍結や所蔵作品が十分ではないという現状がある。その一方で、台東区では伝統的かつ同時代的な美術作品を多く所蔵しているにもかかわらず、ことに現代アートに関してはそれらの展示場所について試行錯誤を重ねている。

このように、二つの地域では芸術文化活動を推進するうえで、それぞれ異なる課題を抱えているわけだが、興味深いことに双方の場所で同一のアーティストによるアートイベント「きむらとしろうじんじん 野点」（豊中市では主催、2回目実施以降台東区では後援）が企画・実施されていた。このイベントは、一見すると全く同じ内容の巡回展のように目されるが、そのまちならではの場所性の発露が感じられる開催会場を選定するためにアーティストとサポートスタッフを含め地域の人々が一緒になってまち歩きに時間を費やし、市や区が、土地の権利者や警察・行政当局などとの交渉に関わる場合もあったという。開催当日には、様々な立場の人々が長時間の作業に一体となって携わることで、その場に固有のゆるやかな共同体が立ち現れる。異物としての現

新しい芸術はどのようにして地域から生まれるのか？：リーズと日本の事例検討

代アートがそれぞれの地域性に溶融し、一回性に彩られた現場の発現が希求されることで、こうした一般参加の集客に結びつく可能性も開かれているのである。

第四章 地域を超えた芸術文化の課題

前章までは、英国と日本における一つの地域で実践された同時代アートの取組みを事例として取り上げてきたが、本章では、第二回公開研究会のテーマとなった地域を超えた芸術文化の諸相に関して、とくに教育、観光、福祉という観点から検討することで、「地域」が孕む問題を浮き彫りにしてみたい。

1. 教育：通信制芸術大学と地域

「通信制芸術大学」という特殊な教育機関に身を置く発表者¹³によって「芸術」と「地域」の関係が再検討された。すなわち、本研究課題の出発点である「地域における芸術の創出」をいったん括弧に入れて、芸術も芸術家も場所に拘束されることを拒み、むしろ新しい場所を求めて両者は常に移動するものと再定義された。移動する理由は、芸術家という「特殊技能者に対し需要が限られていると同時にその需要が各地に点在している」からであり、それゆえ、芸術家は文化的中心にとどまることなく地域をめぐる旅をするのである。地域を巡回するアートの事例としては、国際展や滞在制作が挙げられる。その折、近代になってより専門化した美術制度の文脈で価値付けを行なう限り、どんなに「地域性」を標榜しても、どうしても互換性のある制度内で「地域」が意味づけられてしまうところに、問題があるのではないだろうか。それならば、制度それ自体を問い直し、いっそ新たな価値基準のもとでアートによる「地域性」の創出を考えねばなるまい。現代においてアートの価値はもはや巨大なマーケットや国際的な知名度に左右されない。研究会では、芸術活動そのものが他者との交流である、と仮定し、人々の交流によってもたらされる芸術的な価値に照らして、以下のような提案がなされた。

- 1) [地方特産品と同様に]「芸術教育」も一つの交流・接待モデルとして、芸術の地産地消を可能にするのではないだろうか？

13 発表者：上村博、京都造形芸術大学教授（美学・芸術理論）。

2. 観光：アート of 論理、観光 of 論理、地域活性化 of 論理の間で

「移動する」ということが人間の関係性にどのようなインパクトを与えるか、というモビリティ研究の立場¹⁴から、アート・ツーリズムの事例が紹介され、アート、観光、地域活性の3項目は必ずしも協和しないものであることが検証された（須藤、2017）。

現代アートと観光（ダーク・ツーリズム）の役割には、「違和」や「対立」を持ち込むという点で類似が見出だせる。そうした異化作用は、日常では見向きもされなかった「ノイズの再発見」という覚醒的な作用に転じやすい（須藤、2017：74）。その一方で、アートと観光は、鑑賞者や観光客に特殊な瞬間や切り取られた日常を呈示するのであって、常態を見せることはしない。こうした特殊な瞬間が、「ノイズ」ではなく、たとえば、「ノスタルジア」や「平穏な自然」などのイメージの場合は麻薬的な作用が生じるのだとされる。「アート・ツーリズム」という新たな領域は、美的体験の共有という美的価値を提供してくれる反面、麻薬的な作用によるアート本来の批評性の喪失や大都市を標準とする地域アートの均質化などの問題もまた明示するのである。そこから、発表者は以下のような問題点を指摘した。

- 1）大都市を標準としない地産地消のアート・ツーリズムやアート・プロジェクトもまた、麻薬的な作用と覚醒的な作用の両義性を考えねばならない。アートの観光化、市場化といった悪しき循環を断ち切らねばならない。
- 2）人々の関係性（コミュニケーション）の構築という点で、アートの社会的側面が評価されている。そうすると、芸術は社会のために役にたたなければならないのか。役にたたなければならないとすれば、覚醒か隠蔽のどちらが社会にとって有用なのか。
- 3）アートを動かしているのは誰か？ 現代のパトロンは行政なのだろうか？

3. 福祉：地域を超えるアート アトリエインカーブのアーティスト

大阪市の南部平野区に位置するアトリエインカーブは、知的障がいのあるアーティストたちのために「創作活動の環境を整え、彼らが作家として独立することを支援」している。外的環境は、大和川沿いの広々とした土手に面している一方で、ごみ処理場や特別養護老人ホームなどのある「町外れ」でもある。発表者¹⁵によれば、これはインカーブが地域社会に受け入れられていない、ということを示唆している。

府・市・区など地域行政の助成も得ておらず、それゆえ、インカーブはアーティスト個人を支

14 発表者：須藤廣、跡見学園女子大学教授（文化社会学・観光社会学）。

15 発表者：今中博之、社会福祉法人素王会理事長。アトリエインカーブ クリエイティブディレクター。

新しい芸術はどのようにして地域から生まれるのか？：リーズと日本の事例検討

援するだけでなく、彼らと社会の間を「作品」によってつなぐ役割も担っている。スタッフの専門は福祉や介護ではなく、アートやデザインであり、アーティストが「立案した」デザインを商品化したり広報したりして、アーティストが自立した生活をおくることができるよう、商品の売上げを適正に配分し、家族との間もつないでいる。また、画材の購入、作品の保管などもスタッフの仕事とされる。ときとして、地域や外からの好奇の目からアーティストを守ることも必要となる。アーティストは見世物ではないのである。

インカーブが社会というとき、それは地域社会のことではない。行政機関との関わりについて言えば、運営管轄は厚生労働省、海外への発信は文化庁委託事業として遂行した。

発表者は、以下のように主張する。

- 1) インカーブの作品を「障がい者の」アートというのではなく、現代アートの一潮流として見て欲しい。
- 2) 「閉じながら、開く」……アーティストの制作環境と心身の平穏を守るため、見学者を制限するなど日々の9割は「閉じた」状態を保ち、アートフェア出展など外部へ接続する「開いた」状態は1割にとどめている。

三つの発表の後で、ディスカッションが行われた。各発表者からの問題提起を中心とした討論となったが、日本における「教育」「観光」「福祉」の現状を考えると、「地域が身近なものである」という「常識」が覆された。また、「社会」が含意する対象が、日本と英国では異なるのではないか、という意見もあった。「public」を日本語で厳密に翻すことは難しいし、反対に「世間」を英語にすることは難しい。他者との関係、地域との関係、国家との関係、そうした関係性を見直す共通の契機として「アート体験」があるのではないだろうか。

おわりに

20世紀初頭の英国リーズの取組みを一つの成功事例として、地域における芸術創造を支援するために重要と思われるいくつかの項目を検討した。本考察においては、その結果、1) 人材……芸術家、教育者、支援者、コレクション、2) 人的循環と文化的連関のシステム、3) 集会所（文化施設）、4) 地域固有の雰囲気醸成、の4つの項目を抽出した。

日本の現状に関しては、公開研究会では、豊中市と台東区の2例のみであったが、いずれも、3) 施設と4) 雰囲気醸成において苦心しているように見えた。豊中市の文化芸術振興の直接の担当課は文化芸術課であるが、平成23年度に都市活力創造室として設置され、平成27年度の機構改革によりほぼ同様の業務を引き継ぐかたちで魅力創造課が設けられた。この部署名にも示さ

れているように、地域の魅力、雰囲気をもどのように集約していくのかという点においてアートが活用されている。一方、台東区の文化振興事業の担当部署は、平成16年9月に台東区文化政策懇談会（会長、西洋美術振興財団理事長（当時）高階秀爾氏）によって、「台東区文化政策についての提言」が提出された時点では、企画財政部内にあった¹⁶。現在では、文化振興課は文化産業観光部のなかに置かれている。一見すると、文化財が豊富で何の問題もないように見える台東区であるが、実際にはコンテンツを収納するだけのスペースはない。また、台東区内のそれぞれの地域が魅力的な反面、個性が強く統一がとれていないようにも思われた。項目3)は単に「所蔵する場所」というだけでなく、地域住民のために「活用する場所」でもある。

第二回研究会では、メタレベルから「地域」の意義と芸術との関わりを検討することとなったが、「地域（コミュニティ）」が創造活動とどのように結び付くかは、誰が何を創造するか、あるいは呈示するかにかかっているようだ。それゆえ、インカーブの事例のように、地域から暗黙のうちに排除されていることもある。それは観光においても同じことである。前世紀の英国の事例は、19世紀パクス・ブリタニカの時代の余韻と功利主義的、あるいはイギリス経験論的世界観が浸透している状況で生じた、言ってみれば幸せなモデルなのかも知れない。

ところで、考察の冒頭で提起した4つの項目にもう一つ加えるなら、同時代の主要メディアの適切な使用、となるだろう。事実、20世紀初頭のリーズの主要産業の一つに印刷業があり、視覚芸術作品を伝えるうえで、カラー印刷は大いに効果的であった。また、雑誌や展覧会も一つのメディアと考えることができ、雑誌編集者や批評家、学芸員もまた、リーズと他地域を結ぶ役割を果たしている。残念ながら、インターネットのようなネットワークメディアが主流となった現代においては、新しい芸術の創造は期待できるとしても、それがすぐに模倣・反復され、新しさが消滅し、ついには芸術も地域性さえも均質化してしまう危険にさらされている。現代のメディアは戦力にもなるが、一歩間違えると醸成された雰囲気を破壊することにもなりかねない。この同時代のメディアの問題は、次の課題としたい。

謝辞

本考察を行うにあたって、公開研究会における発表者をはじめ、日本でのインタビューでは、台東区長服部征夫氏、現地における資料調査と関係者へのインタビューでは、リーズ大学スタンレー&オードリー・バートン美術館学芸員ライラ・ブルーム氏、リーズ市美術館主任学芸員ナイジェル・ウォルシュ氏、ヘンリー・ムーア研究所所長ジョン・ウッド氏、グラスゴー大学上級研究員トム・スティール氏、そして、とりわけウィンダム・ルイス記念財団理事ポール・エドワーズ氏にご協力いただいた。執筆にあたっては、発表者を通じて豊中市・台東区の複数の関係所管

16 台東区文化政策懇談会（会長、高階秀爾）「文化政策についての提言」

新しい芸術はどのようにして地域から生まれるのか？：リーズと日本の事例検討
においてご確認いただき、そのうえでご助言いただいた。心よりお礼申し上げます。

本稿は、平成 27 年度～ 29 年度科研費基盤研究（C）採択課題「英国地方都市における前衛美術運動——リーズ・アーツ・クラブの軌跡」（課題番号：15K02175）の研究成果発表の一環として公開する。

参考文献

- Ahad, Nick (2012), 'Celebrating a hundred years of Leeds Art Fund' *the Yorkshire Post*, the 6 July 2012.
- Alexander, Neal & Moran, James ed. (2013), *Regional Modernism*, Edinburgh University Press.
- Blom, Philipp (2012), *The Vertigo Years: Europe, 1900-1914*, New York: Basic Books.
- Carswell, John ed. (1978), *Lives and Letters: A. R. Orage, Beatrice Hastings, Katherine Mansfield, John Middleton Murry, S. S. Kotliansky*, New York: A New Directions Book.
- Fraser, Derek ed. (1980), *A History of Modern Leeds*, Manchester University Press.
- Ingham, Bernard (2005), 'The 50 greatest Yorkshire people?' *the Guardian*, the 13 October 2005.
- Liddington, Jill (2006), *Rebel Girls : their fight for the vote*, London: Virago Press.
- Rutter, Frank (1927), *Since I was Twenty-Five*, London: Constable & Co. Ltd.
- Robers, Marie Mulvey and Mizuta, Tamae ed. (1993), *The Reformers: Socialist Feminism*, London: Routledge / Thoemmes Press.
- Sadler, Michael E, (1927), 'Municipalities and Art' *the Yorkshire Post*, the 30 November 1927.
- Steele, Tom (1990), *Alfred Orage and The Leeds Arts Club*, Basingstoke: Scholar Press.
- Steele, Tom (2014), 'From Ruskin to Nietzsche: Michael Sadler and the Leeds Arts Club' Transcript of a Lecture at Leeds University on the 3 June 2014.
- Surtees, Virginia ed. (1972), *Sublime and Instructive: Letters from John Ruskin to Louisa, Marchioness of Waterford, Anna Blunden, and Ellen Heaton*, London: Michael Joseph.
- 要真理子・前田茂監訳『西洋児童美術教育の思想 ドローイングは豊かな感性と創造性を育むか?』東信堂、2017 年。
- 要真理子・前田茂「地方都市リーズの『雰囲気』の醸成：革新的社会運動から前衛美術運動へ」『跡見学園女子大学文学部紀要』2018 年、pp.21-34（横書き）。
- 須藤廣「観光者のパフォーマンスが現代芸術と出会うとき——アートツーリズムを中心に、参加型観光における『参加』の意味を問う」『観光学評論』Vol.5-1, 2017 年 pp.64-78.
- 服部征夫「台東区の文化行政と東京藝術大学」東京藝術大学音楽学部『同声会報』No.20, August 2017, pp.17-8.

参考 URL

Bradford, Eveleigh. 'Henry Rowland Marsden' The Historical Society for Leeds and District, The Thoresby Society, July 2016, <http://www.thoresby.org.uk/content/people/marsden.php> (checked 8 April 2018)

'A brief History Of Leeds Fine Artists', http://leedsfineartists.co.uk/our_history.html (checked 8 April 2018)

台東区文化政策懇談会（会長、高階秀爾）「文化政策についての提言」、平成 16 年 9 月 http://www.city.taito.lg.jp/index/bunka_kanko/torikumi/teigen.html (checked 8 April 2018)

図表リスト

- ・ イングランド・ウェールズ地図 著者作成
- ・ 豊中市地域区分図 以下を引用。URL: 豊中市ホームページ・第 2 次豊中市都市計画マスタープラン【本編】序章第 2 節 (4)「地域区分」
<https://www.city.toyonaka.osaka.jp/machi/toshikeikaku/tokeimasterplan/tosimasu.files/01tosimasuH30honpen0209.pdf> (checked 8 May 2018)
- ・ 台東区地域区分図 以下を引用。URL: 台東区ホームページ・台東区マスタープラン（平成 18 年 6 月）5 章地域別整備方針「地域区分図」
http://www.city.taito.lg.jp/index/kurashi/kenchiku/keikaku/toshikeikaku/taito_masterplan.files/511syoun_tiiikubun.pdf (checked 8 May 2018)